

今週東京で、Universal Health Coverage Forumが開かれます。世界保健機関(WHO)や日本政府を含めた様々な国や関係組織が集まり、世界中の全ての人々が、より高度な医療サービスを受けられることを目標として、様々な議論が繰り広げられるのです。

世界保健機関の事務局長テドロス氏は、9月の国連総会で、ユニバーサルヘルスカバレッジ(普遍主義的医療制度)についてこう語っています。

「ユニバーサルヘルスカバレッジは、全人類にとって皆が医療サービスを受けることは特権ではなく、権利である、という前提の下に作られるものです。今日においても、大勢の人が限られた生活費を食費に使うか医療費に使うかという選択を強いられています。一家の稼ぎ手が病気になると、家族全員が貧困に陥ることもあります。また、医療機関が遠いという理由で小さな子供の命が失われているという現実が今なおあります。私達は、このような現実を受け入れ続けてはいけません。(中略)ユニバーサルヘルスカバレッジは、人々の健康に貢献するだけでなく、貧困を減らし、雇用機会を拡大し、経済を発展させ、男女平等化をはかり、世界人口を伝染病から守るためのものです。(中略)豊かな国も、貧しい国も、世界各国の政府は、限られた資源を用いて自国民の健康を改良するために、今こそ行動すべきなのです。医療制度を普遍化することは、ビジョン、勇気、そして長期的な計画を必要とする政治的決断なくして実現しません。それぞれの国における医療制度が整うことで、人類皆がより安全で、平等で、健康な社会に住むことが可能になる、と私は確信しています。」

医療制度を整えるとは、非常に複雑なことです。国民保険を設立することによって、国家レベル、そして世界レベルで公的衛生の発展がなされるからだ。世界レベルの公的衛生に関する問題のひとつとして、抗菌薬耐性(Antimicrobial Resistance)を取り上げたい。抗菌薬耐性とは、いわゆる抗生物質を乱用することにより、薬の効果が下がってしまうことをいう。その結果、感染症等の治療が非常に難しくなり、その後の病気に対しての効果が得られず、健康に大きな影響を及ぼすこととなる。多くの発展途上国では、抗生物質は処方箋無しに薬局で安く手軽に入手することができ、そのおかげで死亡率は下がってきている。しかし、発展途上国に住む比較的貧しい人々にとって、抗菌薬耐性の悪化は生死に関わる問題である。安易に手に入る抗生物質の効果が下がれば、病気になる頻度が上がり医療負担が増えることで、貧困が悪化する。貧困が悪化すればするほど医療に使える経費が少なくなり、死亡率も上がってしまう。テドロス氏が言うように、医療制度を整える際、抗菌薬耐性に焦点を当てることは、医療サービスを向上させ、人権を守ることに繋がる第一歩でもある。

それでは、具体的にどのような医療制度が抗菌薬耐性を改善することができるのだろうか？私が現在働いている開発学問研究所(Institute of Development Studies)の調査結果に基づいて、いくつかの改善方法を提案してみたい。

1. 無免許の医者医療知識を改善すること。多くの発展途上国では、貧しい人たちに提供されている医療サービスは、田舎の村に住む無免許の医者である。医療制度を整える上で、各国の政府はまずそのような医者たちが医療サービスを提供できないようにしようとする傾向があるのだが、もし彼らがいなくなってしまうと、貧しい人たちが医療を受ける場所がなくなってしまう。これでは医療サービスのアクセス問題を改善するどころか、悪化させているだけになってしまう。それならば、逆に無免許の医者たちの医療知識を改善し、彼らがより質の高いサービスを提供できるようにしてはどうだろうか。

2. 抗生物質を売ることによる利益を得られなくすること。発展途上国で働く医者、看護師やその他医療系スタッフは、抗生物質を売ることによって利益を得ることで収入増を図っている。例えば、病院で働く医者は、特定の抗生物質を処方することによって薬品会社から

利益を得ることができる。その結果医師は、必要のない抗生物質を処方することが少なくなる。国民保険制度を取り入れることによって、抗生剤などの薬品処方が正しく制限され、医師個人の利益と切り離すことができる。制度が確立されることによって、抗生物質の乱用もなくなるのではないだろうか。

現在日本のような国では、医療制度が整っていることにより国民の安心安全が保たれ、長寿大国に繋がっている。ユニバーサルヘルスカバレッジという大きな課題を、今週、世界中から集まったリーダーたちが、東京で議論を繰り広げる。この機会を利用して、テドロス氏が願うような、より安全で、平等で、健康な世界を作っていく第一歩なることを期待したい。